

物語の読み取りを深める児童を育てる 国語科指導の工夫

- 気付いたことを台本に書き足す活動を取り入れて -

特別研修員 大倉 猛（藤岡市立美九里東小学校）

主題設定の理由

現在、本校は、市内の小学校のうち市立図書館の貸出率が1位になっている。この要因は学校全体で積極的に読書活動を推進している結果であろう。この事実から考えて、本校の児童は読書活動から遠ざかっていないことが分かる。ただし、貸し出されている本の内容を見てみると、ストーリー展開の分かりやすいものを好んで読む傾向がある。その要因として考えられることは、古くから読み続けられている物語よりは、テレビアニメやビデオ・漫画の普及など、児童たちを取り巻く環境の変化によりストーリー展開の分かりやすいもの、読みやすいものの方が児童にとって魅力的であることである。

4月に学級で行ったアンケートによると、教科書に出てくる物語に対して39人中28人の児童が、「面白くない」「面倒くさい」という気持ちを抱いていた。このことから、予想以上に物語に対して、児童の関心が低いことが感じられた。そして、今までの学習経験から物語に対する児童の学習意識が、「どうせまた登場人物の心の動きの変化を読んでいくのだろう」「物語の背景や情況を読んでいくのだろう」という「またか」という思いになっていることを読み取られた。児童は、登場人物はだれか、この場面の季節はいつかなどのすぐに答えが導き出せるような表層的な読みはするが、情景や登場人物の心の動きなどを読み取るという、自分で考え、読み取りを深めることは進んでしようとしないうかがえた。その結果、教科書に出てくる物語を読む際、決して興味を示しているとはいえず、読み取りを深めることで伝わってくる感動や、物語の醸し出す余韻のすばらしさに気付くことなく、思考を巡らさなくても分かる表層的な読みで終わらせてしまっているのである。これは、物語教材を取り上げるとき、登場人物の心の動きを最初から詳しく追っていくという、今までの指導の在り方に起因していると考えられる。また、物語教材の指導の工夫について、考えていく必要性を物語っているとも考えられるであろう。

古くから読み続けられている物語には、人間としての生き方や優しい心遣い、愛情の深さについてなど、児童がこれから生きていくために必要な感情や指針ばかりでなく、心から感動できる内容がたくさん盛り込まれている。純粋な気持ちでいろいろなことを吸収できる小学生の時期こそ、物語の読みを深め、思考力や想像力を養うことはとても大切なことであると考えられる。

このことから、物語の読み取りを深めるために、言葉に着目できる力を育てること、情景や登場人物の心の動きを想像していくための手掛かりとなる言葉を見つけること、言葉から情景や登場人物の心の動きを想像していくことが大切であると考えた。そこで、本研究では、物語の場面にあった表現活動（朗読・群読・劇・紙芝居など）を行うために、自分で選んだ場面を写した台本に、気付いたことを書き足していく活動を通して、物語の読み取りを深める児童を育てていきたいと考えた。

以上のことから、児童が気付いたことを台本に書き足す活動を通して、物語の読み取りを深める児童を育てることができると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

読むことの指導において、情景や登場人物の心の動きを主体に、物語の場面にあった表現形態となるよう気付いたことを台本に書き足す活動を取り入れることが、物語の読み取りを深める児童を育てるために有効であることを、実践を通して明らかにする。

研究の見通し

- 1 つかむ過程において、気付いたことを台本に書き足す活動をすれば、物語の場面を思い描きながら読むようになり、細かく表現するために、情景を想像したり、登場人物の心の動きを考えたりすることで言葉を見つける力が育つだろう。
- 2 深める過程において、意見交換から自分が気付いたことを台本に書き足す活動をすれば、自分で読み取ったことをもう一度考え、物語の多様な読み方に気付くようになり、より細かく表現するために、たくさんの言葉から情景や登場人物の心の動きを詳しく考えながら読む力が育つだろう。

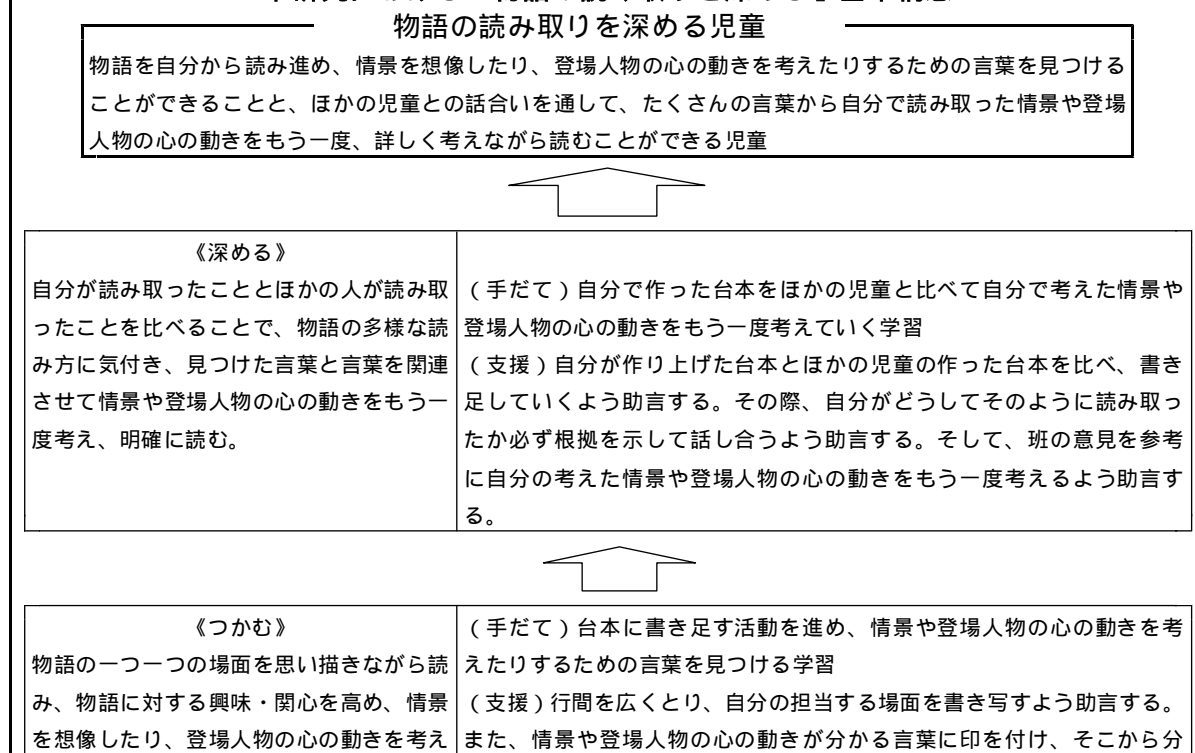
研究の内容及び方法

1 研究の内容

(1) 物語の読み取りを深める児童とは

物語を自分から読み進め、情景を想像したり、登場人物の心の動きを考えたりするための言葉を見つけることができることと、ほかの児童との話し合いを通して、たくさんの言葉から自分で読み取った情景や登場人物の心の動きをもう一度、詳しく考えながら読むことができる児童を「物語の読み取りを深める児童」ととらえる。

本研究における「物語の読み取りを深める」基本構想



たりするための言葉を見つけ、そこから情景や登場人物の心の動きをつかむ。	かること・感じたことをためらうことなく台本に書き足していくよう助言する。
-------------------------------------	--------------------------------------

【学習過程】

【手だて・支援】

(2) 気付いたことを台本に書き足す活動とは

気付いたことを台本に書き足す活動とは、児童が自分で選んだ場面について、行間を大きく開けた台本を作り、その台本に自分が気付いたことを書き足し、それをもとにほかの児童と意見交換しながら、朗読などの表現によって相手にその場面をよりよく伝えるための台本を仕上げていく活動である。

まず、最も印象に残ったところを基準に児童が場面を選び、物語の印象を相手に分かりやすく伝えるための表現活動の形態を考える学習活動を行う。その後、同じ場面を選んだ児童同士でどの表現活動の形態を選ぶかについて話し合い、決定する。そして、あらかじめ作られた台本にそれぞれの表現活動を効果的に行うための気付いたことを書き足す活動をする。台本には、どのようにすれば見ている人や聞いている人に読み取ったことが分かりやすく伝わるかということを目的にして、情景や登場人物の心の動きが分かる言葉を見つけていく。それらの言葉から自分の感じたこと・考えたこと・児童の役割・読みの速さ・読みの強弱・話し方・効果音・形態などを考え、思いついたことを台本に書き足していく。その時、なぜそうした方がいいのかという考えの根拠を、ほかの児童に説明できるよう書き添えていく。次に、自分の台本を持ち寄り、同じ表現をする児童で構成した班で話し合う。児童は、なぜそのように読んだ方がいいのか、なぜそこはどのように演技しなくてはならないのかなど、自分の考えに対する根拠を示しながら、ほかの児童と意見を交換していく。そして自分で納得したほかの児童の意見も台本に書き足していく。ほかの児童の読みに触れながら、自分独自の台本を作り上げていく。

根拠を示しながら自分の考えを書いていく活動を通して、児童は、物語の場面を思い描きながら読み、物語に対する興味・関心を一層高め、情景を想像したり、登場人物の心の動きを考えたりするための言葉を見つける読み取りになる。この時の読みは、物語の自分なりの読み取りができあがるわけであり、今までのような表層的な読みとは異なる。児童は、つまらないと思っていた物語から、登場人物の生き方に触れることができ、物語の面白さに触れることができる。また、ほかの児童と意見を交換する活動を通して、ほかの児童に説明するために一層深い読み取りを進めていくことにつながるとともに、ほかの児童がどのように読み取ったかについて意見を聞くことで、物語の多様な読み取り方を実感し、自分でもう一度情景や登場人物の心の動きを考えることができ、情景や登場人物の心の動きに対する読み取りが詳しくなっていく。児童はこの気付いたことを台本に書き足す活動を通して、登場人物の心の動きや情景を考えるための言葉に着目することができる。そして、ほかの児童と読みの意見交換をすることで、読み取りはさらに深まっていく。

以上のことから、気付いたことを台本に書き足す活動を取り入れることは、物語の読み取りを深める児童を育てる指導を行うのに価値あることと考える。

2 研究の方法

研究の見通しに基づき、以下の計画で授業実践を行い、検証する。

(1) 授業実践計画と検証計画

対象	藤岡市立美九里東小学校5年1組	時数	8時間
題材名	わらくつの中の神様	実施時期	11月
検証項目	検証の観点	検証の方法	
見通し1	つかむ過程において、自分で選んだ場面を写した台本に、読み取りから自分が考えたこと・感じたことを台本に書き	・自分の作った台本に、情景や登場人物の心の動きが分かる言葉を探し、印を付けたか。	

	<p>足す活動を行ったことは、物語の場面を思い描きながら読み、台本をもとに細かく表現するために、情景を想像したり、登場人物の心の動きを考えるための言葉を見つける力が育つのに有効であったか。</p>	<p>・その言葉から情景を想像したり、登場人物の心の動きを考え、気付いたことを台本に書き足せたか。(児童の台本を分析する。)</p>
見通し2	<p>深める過程において、班や学級での意見交換から自分が気付いたことを台本に書き足す活動を行ったことは、自分で読み取ったことをもう一度考え、物語の多様な読み方に気付き、台本をもとにより細かく表現するために、たくさんの言葉から情景や登場人物の心の動きを詳しく考えながら読むのに有効であったか。</p>	<p>・意見交換から自分の気付いたことを台本に書き足せたか。 ・気付いたたくさんの言葉から詳しく考えながら読む力が育ったか。 (児童の発言と児童の台本を分析する。)</p>

(2) 抽出児童

A男	<p>一つの手掛かりから次々に発想を広げてしまい、もとの物語からかけ離れた空想をしてしまうことに課題があると考える。そこで、気付いた根拠をあげて説明するよう促すことで、物語にそって読み取る力を育てたい。</p>
B子	<p>物語の読み取りの面白さに気付いていないことが課題であると考え。言葉を手掛かりにして読み取れるよう、情景や登場人物の心の動きの読み取りにかかわる言葉を見つける力を育てたい。</p>

研究の展開

1 単元設定の理由

本単元「心の通い合いを読み取るう」は四つの題材からなり、その中心的な題材が、「わらぐつの中の神様」である。「わらぐつの中の神様」では、情景を想像したり、登場人物の心の動きを考えるための言葉を見つけることができ、意見交換の場において、根拠を述べながら自分の読み取ったことを発表しようとするのをねらっている。そして、児童が意欲を持って学習を進めるために、自分が選んだ場面を相手に分かりやすく伝えようという表現活動を、最後に取り入れている。

この物語は、昔の話をおばあちゃんが孫のマサエに聞かせるという形になっている。そのため、話の設定が現在のことではないが、話のテンポがよく、マサエとおばあちゃん、おばあちゃんとおじいちゃんのかかわりや情景、登場人物の心の動きなどは平易で分かりやすい。また、情景や登場人物の心の動きを読み取るための言葉が、分かりやすくどの場面にも書かれており、児童が場面を選んで、読み取りを深めていくのに適している。

ここではまず、「わらぐつの中の神様」を読み進め、自分が一番印象に残ったところはどこかを基準に場面分けを行う。児童は雪国の暮らしを想像し、マサエやお母さん、おばあちゃん、おじいちゃんはどうな人なのか想像しながら読み進めていく。そして、自分が選んだ場面を相手に分かりやすく伝えるのはどの表現形態を選べばいいのかを考え、さらに読み進めていく。場面を選んだ後、台本を作り、自分が考えたこと・感じたことを表現形態に合わせて台本に書き足していく。そして自分が読み取ったこととほかの人が読み取ったことを意見交換しながら、読みを深めていく。児童は、自分で選んだ場面について、自分で台本を作るという主体的な活動を通して、主体的に物語を読み取る力を身につけていく。この物語は、登場人物の人柄・考え方を表している言葉や会話、場面の様子がよく現れている言葉が豊富で、児童が台本に気付いたことを書き足す活動をするのに適している。以上の考えから本単元を設定した。

2 単元の目標及び評価規準

目標	<p>情景を想像したり、登場人物の心の動きを考えるための言葉を見つけることができ、意見交換の場において、根拠を述べながら自分の読み取ったことを発表しようとしている。</p>	
評価	<p>おおむね満足している</p>	<p>十分満足している</p>
	<p>・意見交換の場において、根拠を述べながら自分の読み取ったことを発表しようとしている。</p>	<p>・意見交換の場において、根拠を述べながら自分の読み取ったことを発表し、ほかの人の発表した意見についても、自分の意見と比べている。</p>
	<p>・情景を想像したり、登場人物の心の動きを考えるため</p>	<p>・情景を想像したり、登場人物の心の動きを考えるた</p>

規 準	の言葉を見つけることができる。	読むこと	言葉を見つけることができ、たくさんの言葉から情景や登場人物の心の動きを詳しく考えなが読むことができる。
	・情景を想像したり、登場人物の心の動きを考えるための言葉の意味を正しく理解できる。	言語事項	・情景を想像したり、登場人物の心の動きを考えるための言葉の意味を正しく理解し、ほかの児童に説明できる。

3 指導計画（全8時間予定）

*詳細については、資料編参照

過程	時間	ねらい	学 習 活 動	教 師 の 支 援	評価項目(方法)
つ か む	4	《見通し1》 自分が考えたこと・感じたことを台本に書き足すために、情景を想像したり、登場人物の心の動きを考えるための言葉を見つけられる。	自分が選んだ表現形態を思い出しながら、自分の台本をもう一度ゆっくりと読む。 情景や登場人物の心の動きが分かることばに印を付け、どんなことが分かるか台本に書き込んでいく。	関 今日の学習がよい発表をするための核になることを確認する。また、児童が台本を集中して読めるよう、話し合いでは根拠をあげながら必ず一つは発表することを約束しておく。 読 表現形態ごとの印の付け方や書き込み方を説明し、掲示する。それをもとに児童がすぐに理解できるように説明する。また、適宜発表形態ごとに班別に支援する。	読 台本に自分が考えたことを書いている。〔観察・ノートの記述〕
深 め る	5 ・ 6	《見通し2》 意見交換から自分が気付いたことを台本に書き足し、自分で読み取ったことをもう一度考え、たくさんの言葉から、情景や登場人物の心の動きを詳しく考えられる。	自分の台本を机上におき、台本を読み返す。 自分の作った台本とほかの児童が作った台本を見比べるために班を作る。 一つ一つの動作についてどのように発表するか、意見交換する。 ----- ほかの児童からの意見で参考になったものは、自分の台本に書き足していく。 班でどのように表現するのかを決める。	関 自分の台本を、自信をもって発表できるよう、机間指導をていねいに行いながら全員をほめる。 話 効果的な話し合いができるよう、話し合いの仕方を説明する。また、自分の意見を言う時は、どうしてそう読み取ったかという根拠をあげることを伝え、自信をもってできるよう各班に行き回す。 読 ほかの児童の意見についてどう考えるか、場面の読み直しをするように伝え、班の活動を確かめながら支援する。 ----- 書 ほかの児童の意見について、参考になったものは自分の台本に書き足していくよう伝え、後で分かりやすくなるよう色ペンを使うように助言する。	話 自分の意見を根拠をあげて発言している。〔観察〕 ----- 書 自分の台本にほかの児童の意見を取り入れて、書き足している。〔観察・ノートの記述〕

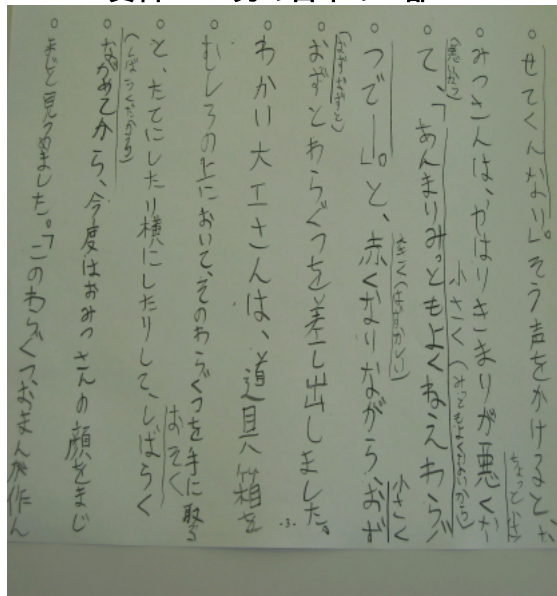
研究の結果と考察

- 1 自分で選んだ場面を写した台本に、読み取りから自分が考えたこと・感じたことを台本に書き足す活動を行ったことは、物語の場面を思い描きながら読み、台本を基に細かく表現するために、情景を想像したり、登場人物の心の動きを考えるための言葉を見つける力が育つのに有効であったが児童は、自分で選んだ場面を、行間を大きくあけて書き写し、それを基に自分が読み取っ

たことや気付いたことを書き足し、自分の台本作りを行った。

A男は、最初から気付いたことを自分の台本に書き足していったが、教師から「なぜそう思ったのか。」と質問されると、根拠を示すことができず、「何となくそう思った。」と答える箇所が多かった。そこで、「どの言葉から、そう思ったのか台本の中にある言葉を示して、説明してごらん。」と言葉かけをすると、「ここを小さく読むのは、この場面は家族みんなでつぶやいている場面なので、つぶやいていることを表すには小さく読んだ方が相手に伝わる。」と言って「『この寒いのに。』と、みんなに笑われながら」の部分を示した。また、「この『カタカタ』は強く読んだ方が、静かな雰囲気の中で、まどの障子が鳴っている音が、よく分かる。」と言い、「『雪がサラサラ』は小さい声で読まないで静かさが出ない。」と答えた。読みが進んでくると、大工さんの会話を元気よく読むということが書いてあったので、「どうして大工さんが言ったところを元気よく読むの」と聞くと、「だって大工さんは、普通元気よく働いているじゃないか」と答えたので、「そうかな。台本の中に手掛かりはないかい。」と聞くと、しばらく自分の台本を見た後で、「分かった。ここに『さっさと行ってしまいました。』と書いてあるから、元気よく読むよりは、知らない人に話しかけるように読んだ方がいいんだ。」と答え、台本に書き足していた。(資料1)

資料1 A男の台本の一部



B子は、初めは何も書けずに自分の台本を読んでいた。そこで、教師が「この『あんまり、みっともよくねえわらぐつで。』の部分はどういうふうを読むといいと思う。」と聞くと、しばらく考えた後、「分からない。」と答えた。そこで、「この言葉の前と後ろの部分をよく読むと何か手掛かりになる言葉があるかもしれないよ。」と言うと、『おずおずと』の部分に線を引き、「『おずおずと』ってどういう意味？」と聞いたので、辞書で調べるよう促した。調べた後、その意味と「自分でも形が悪いかなと思っている」という自分の考えを台本に書き足し、大きく読んだり、小さく読んだりしていた。そして、「分かった。ここは、小さく弱く恥ずかしそうに読むんだ。」と答え、何度もその部分を読んでいった。読みが進んでくると、自分の台本を見せ、「この『うれしくてうれしくて』のところは、おみつさんが本当にうれしいと思っているんだから、大きな声で強く読んだ方がいいと思うんだけど、それでいい？」と聞いたので、「よく気付いたね、その調子だよ。」と答えると、その部分を何度も練習していた。

授業後、A男の台本を検証したところ、15箇所に印が付いており、根拠も示してあった。B子の台本には、12箇所に印が付いていた。また、全員の台本を検証したところ、10箇所以上印を付けたり、気付いたことを書き足し、根拠をあげている児童が、39人中27人おり、中には15箇所以上印を付け、気付いたことを書き足した児童が13人いた。

以上のことから、自分で選んだ場面を写した台本に、読みとりから自分が考えたこと・感じたことを台本に書き足す活動を行ったことで、物語の場面を思い描きながら読み、台本を基に細かく表現するために、情景を想像したり、登場人物の心の動きを考えたりするための言葉を見つける力が育ったと考察できる。

2 班や学級での意見交換から自分が気付いたことを台本に書き足す活動を行ったことは、自分で読み取ったことをもう一度考え、物語の多様な読み方に気付き、台本をもとにより細かく表現するために、たくさんの言葉から情景や登場人物の心の動きを詳しく考えながら読むのに有効であったか前時に作った自分の台本を持ち寄って、同じ場面の児童で班を作り、台本をよりよくするための話し合い活動を行った。

A男は、話し合いの場で自分から挙手し、自分で印を付けたところを積極的に発表していた。そのことを班の児童からほめられると、何度も自分の台本を班の児童に見せていた。また、自分の台本に印を付けなかったところが班の児童から発表されると、「すげー！」と驚いては、根拠を探すために、その部分だけでなく、内容にかかわるかなり広い範囲の文章を、ふだんは一度しか読まないのに、何度も読み返し、納得したものは自分の台本に書き足していた。また、自分が台本に書いたことと、ほかの児童が気付いて台本に書き込んだこととが異なると、自分の正当性を主張し、異なる意見を言った児童と意見を交わし始めた。すると、司会者の児童が「ちょっと、待って。二人の根拠を比べてみようよ。」と提案し、班の児童全員で考え始めた。A男の『このわらぐつ、おまんが作んなったのかね。』の部分は、大工さんのせりふだから、知らない人に話しかけるように普通か小さい声で読んだ方がいいんだ。」という意見に対し、班の児童は「このせりふの前に『まじまじと』と書いてあるから、驚いている様子を出すために大きめに読んだ方がいい。」と説明した。この説明にA男は、『まじまじと』が何かあるとは思っていたけど、そういう意味だったのか。」と納得し、小さな声と大きな声の両方で練習し、「分かった。ここは大きな声の方がいい。」とほかの児童の意見に賛成し、自分の台本を書き直した。

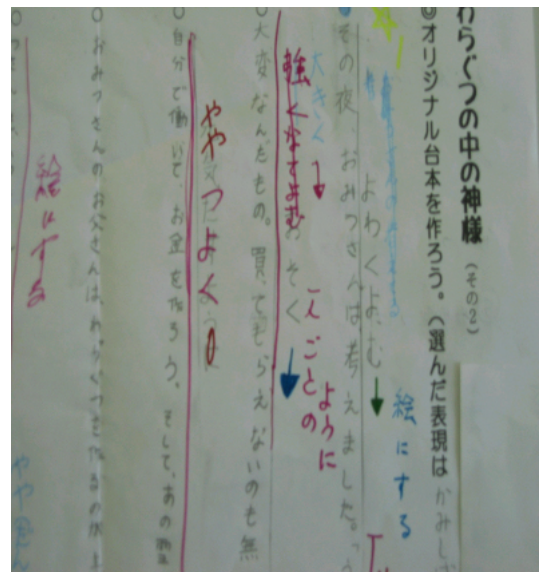
B子は、自分から挙手することはなかったが、司会者から指名されると、自分が印を付けたところを根拠を示しながら発表していた。また、班の児童から出される意見に対しても、自分の台本に書き足し、分からなくなってしまったことは司会者に確認しながら書き足していた。(資料2)

また、ほかの班の話し合いでは『そんなおかしなわらぐつが、うれるかいなあ。』の部分で意見のやりとりが行われた。一人の児童は「その会話のあとに『笑ったり』という言葉があるから、ここは強く読む方がいい。」と言い、一方の児童は『笑ったり』の下に『心配したり』があるから、ここは小さめに読んだ方がいい。」と言った。強く読むと言った児童は、ここは多分、お父さんが言ったところだから強いんだと言ったが、お父さんが言ったという根拠はないじゃないかという班の意見と、親が自分の子どものことを本気で笑うはずがない、ここは心配している気持ちの方が強いんだという意見にまとめ、小さく読むことになった。

授業後、A男の台本を検証したところ、ほかの児童の意見を書き足したところが3箇所、自分の気付いたところを変更したところが1箇所あった。B子の台本には、ほかの児童の意見を書き足したところが9箇所、自分の気付いたところを変更したところが7箇所あった。

また、A男が選んだ場面の情景や登場人物の心の動きは、最初の読み取りでは「朝のお昼近く、雪が降っている。おみつさんは、わらぐつが売れてうれしかった」と書かれていたが、見

資料2 B子の台本の一部



通し1・2の授業後は「お昼近く、野菜はほとんど売れていたが、わらぐつを売るのはあきらめかけている。おみつさんは、若い大工さんに声をかけられてびっくりした。そして、わらぐつが売れて本当にうれしかった」と書かれていた。B子のものも、「おみつさんが帰ろうとしたところに大工さんらしき人が来た」という登場人物の心の動きが、「おみつさんのところに大工さんらしい人が来たとき、おみつさんはどきどきした」となった。

授業後、全員に行った「学習を終えて、どんなことに気付きましたか。」という質問に対して、「何でもないと思って読み流していた言葉が、いろいろな意味をもっていることが分かった」という回答を25人から得た。「いつも読んでいるときより、登場人物の心の動きがよく分かった」という回答を35人から得た。「班の人の意見が聞けてよかった。やったところは同じだけれど、いろいろな考え方があった」と答えた児童もいた。このあと、到達度試験を実施したところ、従来の指導では登場人物の心の動きを読み取る設問で誤答や空欄が多かったが、28人の児童が正解を導き出すことができ、詳しく心の動きを書く児童が多かった。

以上のことから、班や学級での意見交換から自分が気付いたことを台本に書き足す活動を行ったことで、自分で読み取ったことをもう一度考え、物語の多様な読み方に気付き、台本をもとにより細かく表現するために、たくさんの言葉から情景や登場人物の心の動きを詳しく考えながら読めたと考察できる。

研究のまとめと今後の課題

物語を読む活動に「気付いたことを台本に書き足す活動」を取り入れることによって、児童は、興味・関心をもち、楽しみながら物語の読み取りを深めることができた。特に、登場人物の心の動きを考えるための言葉を見つける活動では、ふだんはあまり気にとめない言葉が、実は物語を読む上で大きな意味をもつことが実感できた。また、自分で考えたことを、班で意見交換する活動では、ほかの児童の意見を聞くことにより、読み取りが広がり、より詳しく物語の内容を理解することができた。このことは、物語の読み取りでは、一語一語の言葉に着目しながら読むことを児童が自覚できたことであり、児童が物語の読み取り方を身につけることができたと考えられる。

「気付いたことを台本に書き足す活動」は、児童が自分で選んだ場面の読み取りを深める活動である。児童は、最初から最後まで登場人物の心の動きを読み取っていくという活動で感じていた、『長くて面倒くさい』という気持ちをもつことなく、学習を進めることができた。また、物語全体を通しての読み取りも、意見交換から出されたほかの児童の読み取りを確認するために、その部分だけでなく、かなり広い範囲にわたって一語一語の言葉に着目しながら読み取り、それにより、内容を味わうことができた。これは、必ずしも全文を全員で学ぶ必要はない、ということである。このことから、物語を読み取る力を育てる上で「気付いたことを台本に書き足す活動」を取り入れたことは有効であったと考える。

「気付いたことを台本に書き足す活動」は、班で話し合い、意見交換する活動が大きな意味をもっている。ここで、対立する意見が出されたり、気付いていなかった意見が出されたりして、教師の支援が、より必要となってくる。この活動に、チームティーチングや少人数学習を取り入れるなどして、学習の効果を高めていくことが、今後の課題である。

主な参考文献

- ・石田 佐久馬 編集 『物語のイメージをどうふくらませるか』 東洋館出版社（1992）
- ・小森 茂 編・著 『国語科の授業（高学年）』 小学館（2000）